徒然草つれづれ読み（一）

――第一四四段から第一四九段まで――

浅見和彦

（第一四四段）

栂尾の上人、道を過ぎ給けるに、河にて馬洗ふ男、「あし〳〵」と言ひければ、上人立ちとまりて、「あな尊や、宿執開発の人かな。阿字〳〵と唱ふるぞや。いかなる人の御馬ぞ。余りに尊く覚ゆるは」と尋ね給ければ、「府生殿の御馬に候」と答へけり。

「こはめでたきことかな。阿字本不生にこそあなれ。うれしき掲焉をもしつるかな」とて、感涙を拭はれけるとぞ。

（第一四五段）

御随身秦の重躬、北面の下野入道信願を、「落馬の相ある人なり。能〻慎み給へ」と言ひけるを、いとまことしからず思ひけるに、信願、馬より落ちて死ににけり。道に長じぬる一言、神のごとしと人思へり。

さて、「いかなる相ぞ」と人の問ひければ、「極めて桃尻にして、沛艾の馬を好みしかば、此相を負ほせ侍き。いつかは申誤りたる」とぞ言ひける。

（第一四六段）

明雲座主、相者にあひたまひて、「おのれ、もし兵杖の難やある」と尋ね給ければ、相人、「まことにその相おはします」と申。「いかなる相ぞ」と尋ね給ければ、「傷害の恐れおはしますまじき御身にて、仮にもかくおぼしよりて尋ね給ふ、これ既にその危みのきざしなり」と申けり。

はたして、箭に当りて失せ給にけり。

（第一四七段）

「灸治、あまた所になりぬれば、神事に汚れあり」といふ事、近く人の言ひ出せるなり。格式にも見えずとぞ。

（第一四八段）

四十以後の人、身に灸を加へて三里を焼かざれば、上気の事あり。かならず灸すべし。

（第一四九段）

鹿茸を鼻に当てて嗅ぐべからず。小さき虫ありて、鼻より入て、脳を食むといへり。

（久保田淳校注『徒然草』（新日本古典文学大系）より。一部変改）

はじめに

徒然草を読んでいて、扱いに困る章段は少なくない。無常に言及した段、人事、生活に言及した段、四季折々の景物に言及した段など、古典の教科書に採用されている章段は数多い。これらの著名な章段は読解にあたって、一応読み手としての視座を設けることはある程度可能である。しかしこうした段を除いて、どう読んだらいいのか、作者兼好の意図は奈辺にあるかなどを考えると、はたと立ち往生してしまう章段も少なくない。「つれづれなるままに」の序段より二四三段までの各段をおしならべて見ると、意味不明、意図不明の章段は実のところかなり多く、過半を超える。

著名な章段を取り上げて、徒然草を論ずるのは別に間違っているとは思わない。それはそれで有意義であることは疑いない。しかし問題としたいのは、それ以外のほとんど取り残されたような多くの章段は何なのであろうか。こうしたあまり注目されない諸段に、焦点をあてて、兼好の想いにできる限り近づきたいというのが本稿のねらいである。

一

手始めに第一四四段を取り上げてみよう。

栂尾の上人、道を過ぎ給けるに、河にて馬洗ふ男、「あし〳〵」と言ひければ、上人立ちとまりて、「あな尊や、宿執開発の人かな。阿字〳〵と唱ふるぞや。いかなる人の御馬ぞ。余りに尊く覚ゆるは」と尋ね給ければ、「府生殿の御馬に候」と答へけり。

「こはめでたきことかな。阿字本不生にこそあなれ。うれしき掲焉をもしつるかな」とて、感涙を拭はれけるとぞ。

（一四四段）

栂尾上人明恵にまつわる話で、馬を洗っていた男が「あし〳〵（足々？）」といったところ、明恵の耳には「阿字〳〵」と聞こえた。明恵はその場に立ち止まり、馬の持主の名を聞く。男が「府生殿の御馬に候」と答えると、それが明恵には「（阿字）本不生」という唱え言に聞えた。明恵は感動し、感涙にむせんだというのである。純粋、無垢な精神を持ち続けた明恵の人となりを浮かび上がせるような話の一つといってよい。

徒然草で馬と高僧という取り合わせでいえば、すぐ一〇六段が思い浮かぶ。

「高野の証空上人（誰であるかは不明）」が馬で京都に向かって

いる時、細道で女の乗った馬と擦れ違った。上人の馬子は口取りを失敗し、上人の馬を堀に落としてしまったのだった。上人は激しく憤り、「こは稀有の狼藉かな。四部の弟子はよな、比丘よりは比丘尼は劣り、比丘尼より優婆塞は劣り、優婆塞より優婆夷は劣れり。かくのごとくの優婆夷などの身にて、比丘を堀へ蹴入れさする。未曾有の悪行なり」と口を極めてののしった。しかし、馬子は何をいわれたか分からない。「えこそ聞き知らね」というと、上人はさらに「何と言ふぞ、非修非学の男」と声を荒立てて罵倒するが、上人はハッと気付いて「極まりなき放言しつ」と思い、馬を返して逃げ帰ったというのである。

末尾に付された兼好の評言は「尊かりける諍ひなるべし」。兼好は口取りの男をののしった「証空上人」を、決して非難も批判もしていない。批判していないどころか、むしろ「尊かりける諍ひ」といっている通り、ことのいきさつはともかく、怒り、ののしり、そして自らの未熟さに突然気が付き、その場から逃げ去った「証空」の純心さがむしろ印象に残る。それと同時にわけの分からない(?)上人の淀みなく取り連ねた悪口の言葉の美事さも妙に耳に残る。わけの分からない言葉とはかえって不思議な美しさを伴うものだ。兼好はそんなところに何か感じるものがあったのではないだろうか。

二

徒然草中には馬に関わる章段が意外にも多い。兼好家集には、

夏野ゆく手馴れの駒のむねわけになづむばかりもしげる草哉　(二一三)

といった乗馬に練達していたことを思わせるような歌もあるが、これ以外には見当たらない。

しかし、徒然草には前掲の二段に加えて、賀茂の競べ馬(四一段)、木幡山で喧嘩を売って惨事を招いた馬引きの男(八七段)、説経師をめざしてまず馬芸を習い始めた法師(一八八段)、乗馬の名人安達泰盛の話(一八五段)、馬芸の秘伝を伝えていた吉田某の話(一八六段)など枚挙に遑がないほどである。

兼好自身も巻末近くの二三八段の七つの自讃譚の冒頭で最勝光院の辺りで馬を走らせる男の姿を見て、落馬を予見した話があるほど、兼好は馬に関わる知見、技術にはひそかに自負することがあったのかと思われる。兼好の考えでは、

養ひ飼ふ物には、馬、牛。繋ぎ苦しむる、痛ましけれど、無くて叶はぬ物なれば、いかゞせん。　(二二一段)

とその必要性をあっさり認めているし、これに続く、次の段で、

弓射、馬乗る事、六芸に出せり。必是を窺ふべし。(二二二段)

と、人として必須の要件に馬芸を挙げているほどである。

兼好は馬芸に関心が高かった。知識も深かった。情報も多かった。乗馬技術も高かったのかもしれない。兼好は結構馬好きだったのだろう。だからこそ賀茂の競べ馬に足を運んだのであろうし、馬の世話をする馬子の掛け声に耳傾けた明恵の話にも何か心惹かれるものがあったのではなかろうか。兼好はやはり馬好きであったのだろう。

さて次を見よう。

この明恵の話に続く一四五段は、随身秦重躬（しげみ）という人物が北面の武士下野入道信願を見て、「落馬の相」があると占ったところ、果たして馬から落ちて亡くなったという話である。この観相話に続くのが明雲座主の兵杖の難である（一四六段）。明雲は源平争乱期の天台座主、法住寺合戦で落命した高僧として知られる。

明雲がある時、相人に兵杖の難の有無を聞うたところ、それを訊ねることこそが遭難の相といわれ、はたして箭に当って死んでしまったという話である。一四五段、一四六段が観相の話で共通していることは、云うを俟たないが、実は明雲の話にも馬がからんでいる。

平家物語（巻八・法住寺合戦）では、

天台座主明雲大僧正、寺の長吏円慶法親王も御所（＝法住寺殿）に参りこもらせ給ひたりけるが、黒煙すでにをしかけければ、御馬に召して急ぎ川原へ出でさせ給ふ。武士どもさむ〴〵に射たてまつる。明雲大僧正・円慶法親王も、御馬より射落されて、御頸とられさせ給ひけり。

とその横死のさまが語られている。

慈円の愚管抄では明雲に侍していた者の証言として、

我カタメタル方、落チヌト聞テ、御所ニ候ケルガ、長絹ノ衣ニ香ノ袈裟ゾ着タリケル、輿舁キモ何モカナハデ、馬ニ乗セテ弟子少々具シテ、蓮花王院ノ西ノ築地ノ際ヲ南ザマヘ逃ケルニ、ソノ程ニテ多ク射カケヽル矢ノ、鞍ノ後輪（シヅワ）ノ上ヨリ腰ニ立タリケルヲ、後ヨリ引抜キケル。括リ目ヨリ血流レテ出デケリ。サテ南面ノ末ニ田井ノアリケル所ニテ馬ヨリ落ニケリ。武者ドモ弓ヲ引キツヽ追行キケリ。（巻五）

明雲は頸を取られ、その頸は西洞院川に打ち棄てられていたという。

慈円は事件の関係者や目撃者の話をよく聞き取っていた。徒然草には、

慈鎮和尚、一芸ある者をば下部まで召し置きて、不便にせさせ給ひければ、此信濃入道を扶持し給けり。（一二六段）

という平家物語成立に関わる重要な章段があるが、ここなどはその好例であろう。明雲の最期は乗馬中に射落されたのであった。

明恵と馬飼いの男の会話（一四四段）、落馬の相を言いあてた随身の話（一四五段）、明雲の馬上死の相（一四六段）と連続する三話は〝馬〟に連なる一連話ともいうことができると思う。

三

では、この三話は〝馬〟の繋がりということだけでいいのだろうか。兼好にしては、いささか単純な気がしないでもない。

明恵上人の逸話を集めた明恵上人伝記では、

我は相人と云ふ者の持つなる相書を見ねども、大概仏祖の御詞の末を以て、推して人をも相するに、十が八九は違はず侍り。

と、明恵が占相をも良くしていたことを紹介している。「十が八九」は当ると明恵は自ら云っていたらしい。「あし〳〵」「府生殿」という平凡な言葉に、崇高な語感を感じ取った明恵には観相のちからも

あった。兼好は明恵に少なからず関心を持っていた。

家居のつきづきしくあらまほしきこそ、仮の宿りとは思へど、興ある物なれ。　（一〇段）

という徒然草の一文は明恵の、

タビノ空カリノヤドリトヲモヘドモアラマホシキハコノスマヰカナ　（明恵上人集、15）

を踏まえていることはいうまでもない。兼好は清貧、清僧としての明恵にひそかに尊崇の気持を持っていたのだろう。その明恵には観相の技もあった。そのことを兼好は頭のどこかで思い浮かべていたのではないだろうか。次の落馬死を占相した随身秦重躬が「いつかは申誤りたる」といった言葉と、明恵がいった「人をも相するに、十が八九は違はず侍り」という言葉は何となく似ている。

さて自ら「兵杖の難」の有無を相人に訊ねた明雲座主、はたして人相見のいう通り、馬に乗って逃げる途中、矢で射落とされて落命した。愚管抄の慈円によれば、明雲は快修と座主職を争って、合戦となり、比叡山東塔の五仏院から西塔までの間で、四十八人殺害させた。「スベテ積悪多カル人ナリ」（愚管抄・五）とその悪行ぶりが披露されている。

馬飼いの男の言葉に感動した明恵上人と、政事、権力、政争に深く関わっていった明雲僧正、清僧明恵に対して、「積悪」の明雲、近接する二つの話は対照的でさえある。明恵上人のさわやかさに対して、明雲僧正の話には何となく後味の悪さがのこる。

馬の連想、占相の連想で明恵から明雲までつながっていた。清僧明恵はまた観相も得意としていた。政僧明雲の死は占相によって予見されていた。明恵と明雲、二人の高僧の人格と運命はきわだって描かれている。

四

明雲の横死（一四六段）に続く一四七段以下は短小な章段が続く。

「灸治、あまた所になりぬれば、神事に汚れあり」といふ事、近く人の言ひ出せるなり。格式に見えずとぞ。　（一四七段）

四十以後の人、身に灸を加へて、三里を焼かざれば、上気の事あり。かならず灸すべし。　（一四八段）

鹿茸を鼻に当てて嗅ぐべからず。小さき虫ありて、鼻より入て、脳を食むといへり。　（一四九段）

灸治ならびに身体の保全に関わる話で、三話の連関は明白である。徒然草には医療、医術に関わる話が結構多い。

めなもみといふ草あり。くちはみにさゝれたる人、彼草を揉みて付けぬればすなはち癒ゆ。とりてをくべし。　（九六段）

「風に当り、湿に臥して、病を神霊に訴ふる、愚かなる人なり」と医書に言へるがごとし。　（一七一段・部分）

とある通り、兼好は医術、医書に強い関心を寄せていた。「医書に言へる」とは神農本草経の序に、

自ら百痾の本を致し、咎を神霊に怨むか。風に当り湿に臥して、反つて他人に失覆に責むるは、皆癡人なり。

とあるのを参考にしたものであろう。

また「めなもみといふ草」は徒然草寿命院抄が、

メナモミと云草、説々不同、豨薟、地菘、天名精、鶴虱、以上今世俗訓也。

という通り各説あって、実際にどの草をさすのか不明である。康頼本草に、

鶴虱　味苦平有小毒、和女奈毛美

とある如く、多くの本草書に収載され、蛇の解毒剤として広く知られていた。

兼好自身は直接の医療関係者ではなかったとは思われるが、医術に関する知識は並でなく、多くの医書を通覧し、該博な知識を持っていたようだ。だからこそ、

文武医の道、まことに欠けてはあるべからず。（一二二段・部分）

人皆病あり。病に侵さぬれば、その愁へ、忍びがたし。医療を忘るべからず。（一二三段・部分）

のごとく、医薬の重要性について、兼好はたびたび言及している。さらに、

良き友、三つあり。一には、物くるゝ友。二には、医師。三には、智恵ある友。（一一七段）

と「良き友」の一つに医師を数え上げるほど医療の位置づけは、きわめて高かったといえよう。

意外かも知れないが、一四七段、一四八段に見られる灸治はかつては穢れであった。灸治に際して膿血が出るからである。兼好とほぼ同時代の文保二年（一三一八）二月に成った文保記には、

加レ灸之人、七日、居レ灸之人、三日穢也。

とあり、さらに室町期の成立とされる触穢問答には、

一問、灸治ノ穢如何。答。灸三ヶ所マデハ大社宮寺共不憚之。四ヶ所ニ及バ憚之。

と記されており、徒然草の「灸治、あまた所になりぬれば、神事に汚れあり」（一四七段）という記述と概ね符合する。

しかし、兼好はこの説にはいささか懐疑的であった。それは「近く人の言ひ出せるなり。格式にも見えず」と述べていることからもわかる。続く一四八段で「四十以後の人」が灸治の時、「三里」を焼かないと「上気」するので、必ず焼けともいっているところからすると、兼好は灸治を否定していない。灸治にどちらかというと肯定的であったようだ。

三里に灸を据えないこと、上気するという考え方は梶原性全の万安方（一三一五年成立）に、

明堂云、人年三十已上、若不レ灸二三里一、令二気上衝一レ目、三里所二下一レ気也。

と、あるのが参考になる。三里に灸することは必要だった。その考え方は現代にも引き継がれている。

五

施灸の二つの段に続く一四九段は鹿茸（ろくじょう）の話である。鹿茸とは初夏のころ、新しく生えてくる鹿の角のことで、その形状から袋角と

もいわれる。万葉集に柿本人麻呂の歌として載る、

夏野行く小鹿の角の束の間も妹が心を忘れて思へや　（巻四・五〇二）

もこの角のことを歌っている。和名抄にも、

鹿茸　鹿乃和加豆乃　鹿角初生也

と記されており。当時は日常生活の中で広く知られているものであった。

鹿茸は強精剤、強壮剤であった。平安時代の医家和気広世（わけのひろよ）（清麻呂の子）によって著わされた薬経太素という医薬書には、

鹿茸　温味甘鹹　上ノ毛ヲ焼テ薄切テ吉、酒二夜付テ焙用、腎無力ト腰ノ痛、膝無力ニ吉

とその製法と薬効が述べられている。鹿茸は輔仁本草や康頼本草にもその名が見え、広く一般に知られ、服用されていた薬であった。本草綱目（五一）にも、

不レ可二以鼻嗅一レ之。其中有二小白虫一。視レ之不レ見。入二人鼻一必為レ虫レ顙。薬不レ及也

と記されている。だからこそ兼好は気軽に鹿茸を嗅いではいけない。「小さき虫」が鼻から進入し、脳を食べるからと注意を喚起しているのだろう。

前段で引例した梶原性全には万安法の他、頓医抄という大部の医書があり、そこには、鹿茸丸という丸薬の製法と服用法が述べられている。それによれば、鹿茸、茯苓、甘草など数種類の薬草類を甘葛で丸めて、一回、廿一丸を日に三回服用したらしい。また五味子散という散薬にも、鹿茸と鐘乳を蜜で丸めて、酒とともに七丸ずつ十日ほど服用すると、「陰を起こし、陽を発」すると記されている。これは「交接等ノ治」に効く妙薬であった。

鹿茸はまさに中世の強精剤であった。その主要な原料であったのだ。鹿茸を近くで嗅ぐと小さい白虫が鼻内に進入して、脳を侵すという話は薬効著しい作用を遠回しながら暗示しているのかもしれない。効能著じるしい薬は危険と隣合せなのである。

無住の沙石集（巻九ノ二五）にこんな話が載っている。

ある夫婦。相思相愛で仲睦じい夫婦であった。夫は持戒、修善を積んできたが、命終の際、「自分が死んだら、妻はどうなるだろうか」と心の中で妻のことを心配した。本来ならば、善業で天に生れ変わるところだったが、臨終時のこの思いが妄念となって、妻の鼻の中の虫に生れ変わってしまった。妻が洟をかんだ時、鼻から出てきた虫を見て踏みつぶそうとしたところ、側にいた聖者から「この虫はお前の夫だ、殺してはいけない。お前が好きだったから、鼻の中の虫に生れたのだ」と制せられた。

夫婦愛の末路、男女愛のなれの果ては、鼻の中の白い虫なのである。

徒然草の兼好は鹿茸の話を記しとどめる時、この沙石集の話を思い浮かべていなかったのだろうか。もし思い浮かべていたとすれば、強精の妙薬の鹿茸も、とどのつまりは愛の妄想に終ってしまうということになる。兼好の思考はどこまでいっていたのだろうか。

施灸や鹿茸で兼好が参照したかとも思われる万安方や頓医抄の著

者は梶原性全、沙石集の著者の無住も同族の梶原氏であった可能性が高い。ここも梶原氏の連想が働いていたとすれば、兼好は心のよそで男女愛、夫婦愛の頼りなさ、莫迦々々しさを感じていたのかも知れない。

六

一四七段、一四八段は灸治の話であった。灸治は「神事に汚れ」（一四七段）という考え方に対し、兼好は「格式にも見え」ないことで、「近く人の言ひ出せる」ことであると、その趣旨を否定してみせる。本当にそうだろうか。貴族日記等を繰っていくと灸治の記事は少なくない。一例を挙げれば、二禁で重態に陥った建春門院滋子は灸ならびに針の施療を受けている（吉記・安元二年六月一三日）。ただし「被ト御灸吉兆」とその扱いは慎重であったようだ。吉記の著者、吉田経房（一一四三～一二〇〇）自身も灸治を行うことがあったようで、時には十ヶ所に及ぶこともあったらしい（吉記・承安四年三月二日）。しかし翌三日の条には「血忌によりて灸治を加へず」とあるところからみると、施灸は忌むべきものという認識はあったようだ。「神事に汚れあり」というのは最近の人が言い始めたこととする兼好の言葉は、ややあやうくなってくる。

続史愚抄所引の実躬卿記によると、腫物に苦しむ後二条天皇は施灸を行うことがあったらしい（嘉元二年一二月一日）。また亀山院も「昨今」灸治を受けていると記されている（嘉元三年七月二〇日）。注意されるのはこれらは「密儀」とされていることである。容態の重篤な場合は針灸治療を行うが、やはり不浄なものという意識は拭いきれなかったのであろう。

さてこの亀山院はどうやら多淫の人であったらしい。増鏡（一〇・老の波）によれば、亀山院は異母妹であった「五条の院」、京極院の雑仕だった「貫川」、安嘉門院の「大納言の君」に仕えていた「下野」、大宮院姞子の所にいた「讃岐」、帥中納言為経女の腹からは「あまた生まれ給ふ」と伝えられている。

御心のあくがるるままに、御覧じ過ぐす人なく、乱りがはしきまでたはれさせ給ふほどに、腹々の宮たち数知らず出でき給ふ。大方、十三の御年より宮は出できそめさせ給ひしが、年々に多くのみなり給へば、いとらうがはしきまでぞあるべき。（略）昔の嵯峨の大王こそ、八十余人まで御子持たまへりけると承り伝へたるにも、ほとほと劣り給ふまじかめり。

と、中半あきれ顔でその好色ぶりを伝えている。十三歳から始った亀山院の多淫は八十余人の子どもを設けたという嵯峨天皇と並ぶとまでいっている。

亀山院の女性遍歴ははなやかで激しかった。続史愚抄の伝えるところでは、晩年、亀山院は灸治を受けていたという。院の没年は一三〇五年（嘉元三）五十七歳、兼好二十歳代のころである。兼好がこうした亀山院の噂や行状を知らなかったとは考えにくい。徒然草一〇七段には亀山院の時、男を弄する「しれたる女房」の話が載っている。何となく時代の雰囲気を伝える話である。

施灸の話が終って、次の話は強精剤として知られる鹿茸の話。灸

治をうけていた亀山院が鹿茸を服用していたとはもちろんいえないが、兼好の頭の中には亀山院の姿が揺曳していることはなかったのであろうか。

一四七段の不浄とされる施灸の話に始まり、四十歳を超えたら三里を焼けという。兼好は四十歳は老年の始めと考えていた。それゆえか、次の一四九段では強壮剤、精力増進剤の鹿茸を取り上げる。亀山院は好淫の人であった。院は晩年、「密儀」とされる施灸をうけていた。そして強精剤のもととなる鹿茸の話。わずか数十字にも満たない極小の章段であるが、その背景にはさまざまなことが匿されているような気がする。

（あさみ・かずひこ　本学名誉教授）